

マリアと共に主をあがめる

ルカ 1:46-55

きょうの箇所は「マグニフィカト」と呼ばれる有名なマリアの祈りです。マグニフィカトとは、「あがめます。」という意味でお分かりのようにマリアの祈りの最初の言葉です。美しい祈りのことばですがこれを歌ったマリアの心を深く探りながら、マリアが祈ったように私たちもこの祈りを自分の祈りとしてほしいと願わされます。

1) 賛美と感謝

「あがめます」という言葉で始まるように、マリアの祈りは、神をあがめる賛美の祈りでした。祈りには五つの要素があります。「賛美」、「感謝」、「悔い改め」、「願い」、「とりなし」です。そして、祈るときにはこの順序で祈るのが良いと思います。つまり祈りを賛美から始めるのです。

「賛美」と「感謝」には違いがあります。「感謝」は、神が自分にしてくださったことを思って、神にお礼を言うことです。しかし「賛美」は、自分には感謝できるようなことが何もないと思えても、神であるがゆえに、つまり、神があらゆるものの造り主であり、あらゆるものを超えて偉大なお方であるがゆえに、神をあがめるということです。様々な不幸や苦しみに見舞われたとしても、神は変わることなく、主権者であり、栄光のうちにおられ、愛と恵みに満ちておられます。自分の状態がたとえどうであっても、神を神として神をほめたたえること、それが「賛美」です。全面的に間違っているわけではありませんが賛美とは信仰者が喜んで楽しく讃美歌を歌うことではありません。

聖書の中でこのような賛美をした人に、ヨブという人がいました。ヨブは、神を信じる正しい人で、神の祝福を受け、多くの子どもと財産を持ち、人々から尊敬されていました。ところが、その財産が奪われ、子どもたちも皆、亡くなってしまいました。しかし、ヨブはこう言って、神を賛美しました。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」

(ヨブ 1:21)「自分にとって感謝なことがあろうがなかろうが、神は常にほめたたえられるべきお方である」という信仰をヨブは持っていました。ヨブはこの後、重い病気にかかり、さらに大きな苦しみにあうのですが、神への信仰を保ちました。そして、最後にはかつての祝福を取り戻します。苦しみの中でヨブを支えたのは、ヨブの神を賛美する信仰と、賛美から来る力でした。これは「賛美の力」と呼ばれ、多くの人がその体験を受け、それを語っています。

マリアは、ヨブのように苦難に遭ったのではなく、むしろ、救い主の母となるという幸いを受けましたが、それでも、未婚のマリアにとって、神の御子を産むことは、大きな信仰のチャレンジであり、不安を覚えることでもありました。み使いから聞いた当初は、幸いなことと感じることができなかったかもしれません。しかし、そんな中であってもマリアは、主を見上げ、主を賛美しました。「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。」(46-47節)そして、そのように主を賛美することによって、救い主の母とされたことの幸いを確信し、それを感謝することができるようになりました。「この卑しいはしのために目を留めてくださったからです。ご覧ください。今から後、どの時代の人々も私を幸いな者と呼ぶでしょう。」(48節)と言われている通りです。

私たちも、祈るときには、まず、神を賛美することから始めましょう。そうすると、不思議なことに、感謝なことがひとつひとつ思い起こされてきます。それはささいなことかもしれませんが、今朝目覚めることができたこと、今日も神が私を生かしてくださっていること、身体に痛みがあり、手足が弱っていても、この唇が動いて神に祈ることができること、この目で神の造られた世界の美しさを見ることができること、この耳で神の言葉を聞くことができること…。感謝なことが次から次へとも出てくるのです。このように賛美から感謝が生まれ、そして希望と忍耐を与えられ、困難を乗り越えていくことができるようになること。これが「賛美の力」です。

2) 力とあわれみ

「あがめます」(マグニフィカト)という言葉は、英語の“magnify”に相当します。この言葉には、「大きくする」という意味があります。ですから、「主をあがめる」というのは「主を大きくする」ということです。けれども、それは、主が小さいお方だから、人間が大きくしてあげなければならないということではありません。主以上に偉大なお方はありません。49-50節で、マリアは主がどんなに偉大なお方であるかを語っています。「力ある方が、私に大きなことをしてくださったからです。その御名は聖なるもの、主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。」自分をアピールしても良いでしょう。しかし、それ以上に神が大きくされなければ崇めていることにはなりません。信仰者の証しや話がいつの間にか神よりも自己アピールに代わっているというのはよくある話です。

主は「力あるお方」です。主にはどんな不可能なこともありません。また、主は「聖なるお方」です。神の「聖(きよ)さ」は、人間の正しさや善良さをはるかに超えています。主から見れば、人間の正しさもボロ布のようであり、人間の善良さも利己的で不純なものではないのです。

ですから、主は、人間によって「大きく」してもらい必要などないのです。主はもとから偉大なお方です。ところが、人間は驕り高ぶって、自分を大きくし、神を小さくしてきました。人間はその知恵・知識によって、この世界の成り立ちを知るようになりました。そしてそれを利用して様々なものを作り出してきました。とは言っても人間が知っていることは世界のごく一部であり、できることも僅かなことです。なのに、自分たちは何でもできる、知恵・知識を積み重ねれば、人間は「神になる」と考えるようになりました。しかし、それは、エデンの園で蛇が言った嘘です。偽りです。欺きです。人は、造り主である神を否定することによって、生きる意味や目的を見失い、自分を虚しいものにしてしまったということが真実です。

硬貨(コイン)のような小さなものでも、目の上に乗せれば、それで目が塞がれてしまいます。同じように、人間の驕り高ぶりが、人間の目を塞いで、主の偉大なことを見えなくさせています。「あなたの神は小さすぎる」という本がありましたが副題をつけるとしたら「あなたが大き過ぎるから」となるでしょうね。「主をあがめる」とは、マリアが自らを自己卑下ではなく、「この卑しいはしため」と呼んで自分を小さくしたように、主の栄光を妨げないということです。

マリアは主の偉大な力と、主の聖(きよ)さのゆえに主をあがめましたが、さらに、その「あわれみ」のゆえにも主をあがめています。主が全知・全能のお方であったとしても、聖なるお方でなければ、主は独裁的な暴君のようになってしまいます。また、主が聖なる方であっても、あわれみ深いお方でなければ、私たちは主に対して恐れ、おののくだけで神に近づくことができません。しかし、主は、罪深い者を赦し、小さな私たちをも愛して、祝福してくださる、あわれみの神です。しかも、主の「あわれみ」は気まぐれな、一時的なものではありません。50節に「主のあわれみは、代々にわたって主を恐れる者に及びます。」とある通り、主のあわれみは変わるものではないのです。

この神のあわれみのゆえに、小さな私たちも、偉大な神、聖なる主を人々に表すことができるのです。多くの人が持っているスマートフォンのカメラのレンズは、とても小さいものです。しかし、そんな小さなものでも大空を写すことができ、大自然を捉えることができます。私たちの小ささや弱さ、足りなさは、神をあがめ、主なる神を証しするのに妨げにはなりません。むしろ、小さい方が、主がご自分を示されるのを妨げずに済むのです。パウロは自分を「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私」(エペソ 3:8)と呼びましたが、同時に、「私の身によって、キリストがあがめられることです」(ピリピ 1:20)とも言っています。マリアが「あがめます」と言ったのと同じ言葉が使われています。主は、そのあわれみのゆえに、私たちを通して、しかも私たちの弱さ、足りなさ、罪深さを通してご自分を大きく示してくださるのです。

3) 逆転する神の救いのみわざ

主を賛美し、主の力とあわれみについて語ったマリアは続いて、主の救いについて語ります。51-53節の言葉は、救いの預言です。「主はその御腕で力強いわざを行い、心の思いの高ぶる者を追い散らされました。権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。」ここで使われている動詞はすべて完了形です。「行われました」、「散らされました」、「引き降ろしました」、「引き上げました」、「満ち足らせました」、「追い返されました」という言葉が使われています。預言とは将来起こることです。しかし預言の言葉が完了形で書かれているのは、それが、神のみこころの中ではすでになさされていて、必ず実現することを表しているということです。イエス様がその救いのみわざを成し遂げられるのは、この時からおよそ30年後のことですが、ここでは、そのことがすでに成されたかのように語られています。

ここには、「高ぶっている者」が追い散らされ、「権力ある者」が王位から引き下ろされ、代わりに、「低い者」が高く引き上げられる、また、「富む者」が無一物になり、「飢えた者」が満たされるとあります。権力の座に座って高ぶっていた者が裁かれ、彼らによって卑しめられ、低められていた人が高められるということです。この時のユダヤはローマの軍事力に支配され、ローマから税を吸い上げられていました。人々は貧しさにあえいでいました。救い主が来て、ユダヤをローマの権力から解放してくれることを人々は願っていました。ところが、イエスは、この世の権力者でも、富める者でもなく、低く、貧しいお姿でおいでになりました。それによって低い者を高め、貧しい者を満たすためでした。

人々は、イエスが自分たちの描いていた政治的、軍事的な救い主でなかったので、イエスをキリストとして、信じ、受け入れませんでした。イエスが罪の赦しや神の国について教えると、イエスから離れて行きました。主であるお方を低め、栄光に富んだお方を貧しい者のように扱いました。さらに、こともあろうか、正しいお方を罪に定め、祝福に満ちたお方をのろいの木、十字架にかけ、いのちの主を殺したのです。彼らは神の栄光ではなく人間の栄誉を求めました。神の愛に裏切りをもって答えたのです。なんと皮肉なことでしょう。まさに「神の心、人知らず」これは、人間の現実の姿です。人々は、罪によって神の救いを最悪な形に変えてしまったのです。

では、もう救いは無くなってしまったのでしょうか。いいえ、イエスは死を滅ぼし、復活されました。昇天され、もとおられた父なる神のもとに帰られました。そこから、聖霊を注いでくださいました。神の救いが人間の罪によってひっくり返されましたが、イエス・キリストは、さらにそれをひっくり返して赦しといのちを私たちにくださったのです。

マリアが預言した通りのことが成就しました。私たちはそれを目の当たりにしています。この救いは、今、私たちの手の届くところにあります。だれでも、イエス・キリストを信じるなら、たとえ、罪の深い泥沼に沈んでいたとしても、そこから引き上げられ、高められます。神から離れ、虚しさの中に生きていたとしても、救い主によって満たされるのです。どんな人であっても受けることの出来る救いを体験されているのでしょうか。イエス・キリストを信じ、マリアとともに、「私の魂は主をあがめます。」と、主に向かって、賛美をささげましょう。まだ信じていない方にも救いの手は差し伸べられています。ためらわずに「私にも罪の赦しと救いが必要です。私は主イエスを私の救い主として信じます。」と神様に告げてください。祈ります。